HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞
Author(s)	山越, 康裕
Citation	北方言語研究, 1, 63-78
Issue Date	2011-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45230
Type	bulletin (article)
File Information	nls-1-04.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 1: 63-78（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2011）

シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞[1]

山 越　康 裕
（札幌学院大学）

0. はじめに

モンゴル語をはじめとするモンゴル語族の諸言語には、名詞句におもに接続し、人称を標示する付属形式が存在する。この付属形式は一般に personal possessive particle (Janhunen (ed.) 2003, Poppe 1960, Street 1963, etc.) と呼ばれ、先行する名詞句の所属先の、もしくは先行する名詞句に関係する人称を指示する機能をおもに有する[2]。

ただし、この付属形式（以下、「人称所有小詞」とよぶ）は名詞句に接続するだけではなく、一部の動詞にも接続し、主語人称を指示することもある。本稿では、近隣のモンゴル語を対象とした先行記述と適宜対照しつつ、上記のような人称所有小詞のふるまいと機能について記述するとともに、文末の述語として機能する未来分詞に 1 人称所有小詞が接続する際には、脱従属化[3]が生じている可能性があることを指摘する。

1. 人称所有小詞の形態的特徴

まず、シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞としては、表 1 に示す 6 種類が確認される。

	単数	複数
1 人称	=mni（短縮形 =m）	=mnai$_2$[4]
2 人称	=s^{j}ni（短縮形 =s^j）／敬称 =tni	=tnai$_2$
3 人称	=in（または=ni, =n）	

表 1. シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞

[1] 本研究は平成 22-24 年度文部科学省科研費補助金（若手研究 (B)）「モンゴル系危機言語であるシネヘン・ブリヤート語の総合的記述」（#22720163）による成果の一部である。本稿で用いたシネヘン・ブリヤート語の資料は、いずれも筆者が 2000 年から継続的におこなっているフィールドワークにより得られたものである。言語コンサルタントとして、ドンドク氏（40 代男性）ほか、中国内蒙古自治区呼倫貝爾市エウェンキ族自治旗シネヘン村在住の多くの方々にご協力いただいた。ここに感謝の意を表したい。また、本稿執筆にあたり、匿名の査読者お二人よりそれぞれ、重要なご指摘、アドバイスをいただいた。ここで改めて御礼を申し上げたい。それでもなお本稿の内容に誤謬・不備等がある場合は、当然ながら全て筆者がその責任を負う。

[2] 日本においては「所属小辞」（水野 1991、梅谷 2003）、「人称関係小辞」（一ノ瀬 1988）などと呼ばれており、必ずしも呼称が一致していない。「所有」にかえて「所属」「関係」等の呼称を用いるのは、この形式が積極的に所有者の人称を標示するというより、当該名詞句・分詞等に関係する人称を標示するためである（cf. 一ノ瀬 1988、Kullmann and Tserenpil 1996）。こうした呼称についても議論の余地が残されているが、ひとまず本稿では英語術語に準拠し、「人称所有小詞」を用いる。

[3] desubordination (Aikhenvald 2004); insubordination (Evans 2007) を指す。日本語訳は Pellard (2010) に従う。

[4] シネヘン・ブリヤート語には順行的な母音調和が存在する。付属形式の母音調和による交替形を下付き数字で示す。なお、シネヘン・ブリヤート語では本稿の分析対象である人称所有小詞を含む一部の小詞も、host の母音に同化する。

3 人称においては数の区別がなく、2 人称単数では無標形と敬称形の 2 種類が存在する。このうち、1 人称複数所有小詞は、今回分析の対象としたテキスト（山越 2002、2006a）中では用例が確認されない[5]。

これらはアクセント位置の移動等の特徴から音韻的には後倚辞（enclitic）と判断される（山越 2004）。なお、1 人称複数所有小詞（=mnai~=mnei）および 2 人称複数所有小詞（=tnai~=tnei）には母音調和による交替形が確認されている[6]。

また形態的には名詞句・分詞および副動詞の一部（以下、これら接続元をまとめて host とよぶ）に接続する。山越 (2002) および山越 (2006a) の各テキストにおける使用状況は表 2 の通りであった。

	名詞類	動詞		
	名詞句	分詞	副動詞	計 (%)
1SG	21 例	6 例	0 例	27 例 (13%)
1PL	0 例	0 例	0 例	0 例 (0%)
2SG	27 例	11 例	0 例	38 例 (19%)
2SG.HON	1 例	0 例	0 例	1 例 (0.4%)
2PL	3 例	0 例	0 例	3 例 (1.5%)
3	82 例	46 例	7 例	135 例 (66%)
計 (%)	134 例 (66%)	63 例 (31%)	7 例 (3%)	204 例 (100%)

表 2. host 別にみる各人称所有小詞の分布

以下、名詞句、分詞、副動詞それぞれが host となる例を示す。

(1) axai=**s^{j}ni**
兄=**2SG:POSS**
「君の兄」 [山越 2006a: 147]

(2) jab-xa=**mni**
行く-FUT.PTCP=**1SG:POSS**
「私が行く（ことは）／私は行かなくてはならない」 [山越 2006a: 146]

(3) tii-z^{j}ai-tar=**in**
そうする-PROG-LMT.CVB=**3:POSS**
「（彼が）そうしていると」 [山越 2002: 120]

[5] ただし、テキスト以外の日常会話から使用例を収集している。なお、以下本稿で提示する用例の出典を、各用例末尾に [ ] で示す。出典が明示されていない用例は、日常会話の観察および elicitation によって得られた用例である。

[6] 本来、母音調和は語内部でおこる現象であるが、このように語境界を超えて小詞も母音が交替する例は、このほかに述語人称小詞（e.g. 2 人称単数=ta~=te~=tɔ）、疑問小詞（=go~=gu）などいくつか存在する。山越（2004）で述べたように、筆者は高低アクセントの変化の有無が倚辞と接尾辞とを分ける基準と考えており、母音調和は語と接尾辞とを区別する一つのパラメータとはなりうるものの、絶対的基準にはなりえないという立場をとっている。

シネヘン・ブリヤート語の名詞句や分詞は格接尾辞をともなう。このとき、人称所有小詞は [語幹-格接尾辞] に後続する。

(4) axai-jii=**s^{j}ni**
兄-ACC=**2SG:POSS**
「君の兄を」

(5) negen-ei=**n**[7]
１-GEN=**3:POSS**
「その一つの」 [山越 2002: 108]

(6) ir-xe-de=**n**
来る-FUT.PTCP-DAT=**3:POSS**
「（彼/らが）来るときに」 [山越 2006a: 151]

以下、名詞句・動詞をそれぞれ host とする場合の統語上のふるまいと機能についてそれぞれみることにする。

2. 名詞句＋人称所有小詞

2.1 所有者標示機能

名詞句が host となる場合、(1) の例のように先行する host の所属先の、もしくはその名詞句に関係する人称を示す。同じく所属先・関係者の人称を示す方法として、シネヘン・ブリヤート語では属格代名詞を先行させる形式 (7) がある。以下、[host= POSS]によって所属・所有関係を示すタイプ（=(1)）を「小詞型」とよび、 [所有者-GEN host] によって所属・所有関係を示すタイプ（=(7)）を「属格型」とよぶことにする。

(7) s^{j}inii axai
2SG:GEN 兄
「君の兄」

さらに、属格代名詞、人称所有小詞の双方で所属先・関係者の人称を示す形式 (8) もある。これを「二重型」とよぶことにする。

(8) s^{j}inii axai=s^{j}ni
2SG:GEN 兄=2SG:POSS
「君の兄」 [山越 2006a: 147]

シネヘン・ブリヤート語において、所有者-被所有者の関係を示す場合、以上の三つの形式のいずれかが用いられる。この三つの形式のあいだには何らかの意味・機能的差異が存

[7] シネヘン・ブリヤート語では形容詞・数詞なども名詞的に機能し、名詞類（山越 2006b）としてまとめられる。このことから、これらを主要部とする句構造も広く名詞句とみなす。

在するものと考えられるが、現時点では明らかではない[8]。

ただし山越 (2006a) を用いて、各人称におけるそれぞれの形式の使用状況を分析したところ、表 3 のような分布となった。表 3 では山越 (2006a) 中で用例が確認されなかった 1, 2 人称複数代名詞を除いている。

	小詞型	属格型	二重型
1SG	16 例	12 例	2 例
2SG	7 例	1 例	7 例
3	9 例	0(+22)[9]例	2(+1)例

表 3. 所有関係標示形式の分布

このテキスト中では、3 人称代名詞属格が被所有者に先行する属格型の使用例は確認されなかった。3 人称において属格形が確認されないという点、また 1, 2 人称において小詞型が属格型よりも多用されている点を考慮すると、小詞型が属格型よりも優勢であることが考えられる。ただしテキストが自然発話によるものではなく、また表 3 にみるように用例自体が乏しいという問題があるため、この点にかんしては（機能的差異の分析も含め）、今後より詳細に分析をおこなう必要がある。

また、この表 3 の分布は、隣接するモンゴル語における分布と比べ、二重型が用いられている点が大きく異なる。山越 (2010: 110) で述べたように、モンゴル語の場合は双方の標識、つまり属格と人称所有小詞がともに所属先を標示すると判断される二重型はみあたらない。みかけ上二重型となっている形式について、梅谷 (2003: 216) は「人称代名詞属格形は所属の意味を表し、人称所属小辞[10]は非所属用法[11]で用いられる」と分析したうえで、その証左として (9) のような人称の「不一致」の例をあげている[12]。

(9) **Manaj** “Xaan tüüx” žüžig=**čin’** kino-goor bol gurvan angi-taj šüü dee.
1PL:GEN PN 演劇 2SG:POSS 映画-INS FP 3 部-PROP SFP SFP
「我々の『ハーン・トゥーフ』という演劇は映画では三部作なんですよ」
[梅谷 2003: 216]

つまり、モンゴル語では人称所有小詞が所有者の人称・数を標示しない場合があるということである。一方、シネヘン・ブリヤート語の二重型の例からはこのような「不一致」がみあたらない。先行する人称代名詞属格形（3 人称の場合は普通名詞属格形もありうる）

[8] 近隣のハムニガン・モンゴル語では、所有者にとって身近な所有物ほど小詞型が好まれる傾向があることから、譲渡可能性による使い分けがあることが推測される（山越 2010）。ただしシネヘン・ブリヤート語においては、そのような使い分けは確認できなかった。
[9] カッコ内の数字は、先行する所有者名詞として、3 人称代名詞ではなく普通名詞属格形が用いられている例の数を示している。
[10] 本稿における人称所有小詞を指す。
[11] 人称所有小詞が所有・所属先を明示するのではなく、先行名詞句を強調するために用いられる用法（梅谷 2003）を指す。
[12] 梅谷 (2003: 216) の音韻表記・訳にもとづく。形態素分析およびグロスは筆者による。

と人称所有小詞は常に対応し (10)、対応関係を崩した、つまり不一致の状態にした作例 (11) は非文と判断される。

(10) **minii** s^{j}aarpa-jii=**mni** xaana tab^{j}-aa=ta.
1SG:**GEN** マフラー-ACC=**1SG:POSS** どこに 置く-IPFV.PTCP=2PL
「ぼくのマフラーはどこに置きましたか？」

(11) * **minii** s^{j}aarpa-jii=**s^{j}ni** xaana tab^{j}-aa=ta.
1SG:**GEN** マフラー-ACC=**2SG:POSS** どこに 置く-IPFV.PTCP=2PL

こうした制約をみると、モンゴル語に比べ、シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞は所属先・関係者の人称を明示する機能が強いといえる。

ただしその一方で、所属先・関係者の人称を示しているとはとらえがたい（＝「非所属用法」（梅谷 2003）に相当する）用例もわずかながら確認できる。山越 (2006a) からは用例が確認されなかったものの、民話等の語りを収録したテキスト（山越 2002）では、2 人称単数所有小詞が用いられた 10 例（全体の 4.9%）が、「非所属用法」として用いられていた。

(12) zaa, tii-xe-de=n xuuged-uud-e=**s^{j}ni** aba-d-aa
さあ そうする-FUT.PTCP-DAT=3:POSS 子ども-PL-E=**2SG:POSS** 父-DAT-REFL
ɔs^{j}-ɔɔd=le gɔn^{j}g^{j}ɔn-ɔɔd hal-aa-gui ge-ne.
着く-PFV.CVB=FP 頼む-PFV.CVB 別れる-IPFV.PTCP-NEG という-PRS
（子どもたちが、自分たちの母（＝天女）が衣をまとうと白鳥に変身すると知って）「さあ、すると子どもたちは（自分の）父親のところに行って（隠している衣を出してくれと）せがんで離れないという」 [山越 2002: 109]

(13) tere xun=**s^{j}ni** ubhen sɔɔ nusgen bai-z^{j}ai-g-aad, ter-ii=**s^{j}ni**
その 人=**2SG:POSS** 草 の下に 裸 いる-PROG-E-PFV.CVB 3SG-ACC=**2SG:POSS**
asa xatx-ool-han=jum=bud=dee. ter-ii=**s^{j}ni** ger-t-ee
フォーク ささる-CAUS-PFV.PTCP=SFP=SFP=SFP. 3SG-ACC=**2SG:POSS** 家-DAT-REFL
ɔr-ool-xa-da=n tere=**s^{j}ni** jaa-g-aa=jum bai-na...
入る-CAUS-FUT.PTCP=3:POSS 3SG:NOM=**2SG:POSS** どうする-E-IPFV.PTCP=SFP いる-PRS
「その人が草の下で裸でいたので、そいつをフォークでつついたんだって。そいつを自分の家に彼（≠裸でいたその人）が迎え入れたとき、そいつはどうしたんだったか…」 [山越 2002: 121]

(12) (13) の 2 人称単数所有小詞が接続する例は、いずれも host が民話の中の登場人物を指示している。この登場人物が「聞き手」に直接関係している・聞き手に所属している存在だとは考えにくいことから、「非所属用法」にあたると判断できる。

一方で、1 人称、3 人称所有小詞が用いられた例は、host の所属先が話し手（1 人称）もしくは第三者（3 人称）にあることが明確であった。ただし、対象テキスト中では次の (14)

における xonʲ sʲoboo-jii=**n** についてのみ、「非所属用法」にあたる可能性を残している。

(14) habar=in habard-aad=le ul-sʲ-ɔɔ-xɔ-dɔ tere
爪=3:POSS 引っかく-PFV.CVB=FP 残る-PFV-IPFV.PTCP-FUT.PTCP-DAT 3SG
niid-eed jab-sʲ-ba, teŋgerʲ-tʲe-jee. ii-g-eed xonʲ sʲoboo-jii=**n**
飛ぶ-PFV.CVB 行く-PFV-PST 天-DAT-REFL こうする-E-PFV.CVB 白鳥-ACC=**3:POSS**
habar=in xar bai-dag ge-deg.
爪=3:POSS 黒い いる-HBT.PTCP という-HBT.PTCP
「（天女の化身である白鳥の）爪が（鍋を）引っかいただけになってしまって、それ（＝白鳥）は飛んで行った、（自分が暮らす）天へと。このことがあって白鳥というものは爪が黒くなっているという（ようになった）」 [山越 2002: 111]

(14) は、「天女の化身である白鳥が（自分が暮らす）天へと帰っていく際に、乳の入った鍋に爪をひっかけたことで、いまの白鳥の爪が黒くなっているのだ」ということを伝える一節である。この xonʲ sʲoboo-jii=**n** の 3 人称所有小詞が「天」に照応し、「天」に所属していると読み取ることができる。しかし一方で、述語動詞が習慣形であらわれていることから、ここでの xonʲ sʲoboo「白鳥」が直前までの文脈で用いられた特定の「白鳥」とは異なり、総称的に用いられているともとらえられる。その解釈の場合は、この 3 人称所有小詞が「天」に照応するかどうかは判然としない。そのため、「非所属用法」である可能性も捨てきれない。

2 人称所有小詞に集中して非所属用法が集中しているのは、host を聞き手に所属している要素として示すことで、聞き手の関心を引きつけているためと考えられる。これは、水野 (1991) がモンゴル語の所有小詞について「関心の所在がどこにあるかを示す」と指摘しているのと同様のふるまいといえる。所有者・所属先を示すという所有小詞の機能が拡張したものととらえてよいだろう[13]。

ただし、モンゴル語と大きく異なる点は、ここまで見たような「非所属用法」が、シネヘン・ブリヤート語ではあくまで周辺的な用法である点である。モンゴル語にかんしては、水野 (1991) が「用例を分析してみると、（用語上での矛盾を承知でいえば）純粋に所属を表している所属小辞[14]は少ない」と述べている。つまり、非所属用法として用いられるケースが多いということになる。一方、シネヘン・ブリヤート語では所属関係が明確な場合に用いられ、(12) (13) のような「非所属用法」はむしろわずかである。さらに、属格名詞（代名詞を含む）が先行している場合に、その人称・数と一致しない人称所有小詞が使われる（=(11)）のような例も確認されない。

以上をまとめると、モンゴル語では人称所有小詞が所有者・所属先の人称・数に一致しない場合があるのに対し、シネヘン・ブリヤート語では一致のマーカーとして（つまり、人称・数を標示するマーカーとして）人称所有小詞が機能しているといえる。

[13] このように考えると、「所属用法」と「非所属用法」との間に境界線を引いて明確に区別することは困難となる。
[14] 本稿における人称所有小詞をさす。

また、人称所有小詞が一致のマーカーとして用いられやすいという上記の傾向は、下の表 4 に示す、人称所有小詞のテキスト別の用例の分布からも読み取ることができる。民話等の語りである山越 (2002) と、日常会話の文例を集めた山越 (2006a) とで名詞句に接続する人称所有小詞の使用例の分布を比較すると、話し手・聞き手以外の第三者が照応先となる 3 人称所有小詞は山越 (2002) で 68 例、山越 (2006a) で 14 例と、他の人称所有小詞の使用分布に比べて著しい差がみられた（表 4 参照）。

	山越 (2002)	山越 (2006a)	計
1SG	3 例	18 例	21 例
1PL	0 例	0 例	0 例
2SG	10 例	17 例	27 例
2SG.HON	1 例	0 例	1 例
2PL	3 例	0 例	3 例
3	**68 例**	**14 例**	**82 例**
計	85 例	49 例	134 例

表 4. テキスト別にみた名詞句+人称所有小詞の出現数

山越 (2006a) で扱った日常会話の文例は、内蒙古大学蒙古語文研究所が 1980 年に実施したモンゴル諸語の現地調査で用いた調査票「日常会話翻訳」をもとにしている。この文例集は、問い-答えの対応がある文例がいくつかあるものの、多くは前後の文脈がないものとなっている。そのため、所有者となる第三者の情報が欠落している場合が多い。一方、民話などの「語り」である山越 (2002) では、文脈から所有者を特定することが可能な場合が多い。とくに 3 人称所有小詞については、照応先を特定しやすい「語り」のテキストに多く用いられていることを考えると、やはり人称・数のマーカーとして機能していると考えられる。

以上の点から、シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞は、名詞に接続する場合には所有者の人称・数を標示するために用いられるとまとめられる。ただしその機能の延長として、2 人称所有小詞は聞き手の関心をひきつけるために、必ずしも聞き手の所有物ではない対象に対して接続し、host を「聞き手に関係するもの」として示す場合もある。

モンゴル語では人称・数における一致を示すマーカーとして必ずしも機能しないのに対し、シネヘン・ブリヤート語では基本的に人称・数のマーカーとして機能する。このような差異がみられる原因はわからないが、シネヘン・ブリヤート語では述語人称小詞による主語と述語の一致があり、モンゴル語ではそのような一致がないという点に関係しているのではないかとも考えられる[15]。ただし、仮にそうだとすると、小詞をともなわない属格型の所有構造がなぜ存在するのかが問題となる。これについては今後、より詳細に分析を進

[15] 山越 (2010) ではブリヤート語と（地理的・系統的に）近い関係にあると考えられるハムニガン・モンゴル語の所有構造について扱っている。ハムニガン・モンゴル語についても、用例を見るかぎり所属関係が明確な場合に限定して人称所有小詞が用いられており、やはり (9) のような例は確認されない。ちなみに、ハムニガン・モンゴル語にも主語と述語の一致が存在する。

める必要がある。

2.2 その他の機能の可能性

モンゴル語の人称所有小詞にかんして、Luvsanvandan (1966: 270) は「主語のあとに人称所有小詞を用いて主語を明示できる」（原文：Мөн гурван биед хамаатуулах ёсыг холбогдох **өгүүлэгдэхүүн** гишүүний хойно нь хэрэглэж тодочлон үзүүлж болио.）とし、また小沢 (1986: 107) は「主格表示の語尾として用いられる」と説明している。シネヘン・ブリヤート語のテキストを確認したところ、たしかに人称所有小詞をともなう名詞句は、節の主語名詞句に接続する例が多いという特徴がある。節の主語名詞句に接続する例は、名詞句に接続した全 134 例中 93 例あった (15)。

(15) axai=**m** nam-ahaa huul-de bɔd-dɔg.
兄=**1SG:POSS** 1SG-ABL 終わり-DAT 起きる-HBT.PTCP
「私の兄は私より遅く起きます」 [山越 2006a: 170]

しかし、主語に接続する例が多いという傾向はあるが、主語以外の名詞項にも接続する（134 例中 41 例は主語以外の要素に接続）[16]。主語以外の名詞項に接続した例のなかでは、節内部に他の名詞項があらわれない場合 (16) に接続する例が比較的多く確認された。主語以外の要素に接続しており、かつ節内部に他の名詞項があらわれなかった例は全 134 例中 22 例であった。また、残りの 19 例のうち、人称所有小詞が接続した名詞句が節の先頭に位置していた例が 10 例あった (17)。

(16) ubgen=**in** itg-eed xobsah-ii=**n** ug-s^{j}ix^{j}-ɔɔ.
夫=**3:POSS** 信じる-PFV.CVB 衣-ACC=**3:POSS** 与える-PFV-IPFV.PTCP
「（彼女の）夫は（彼女を）信じて（彼女の）衣を渡してしまった」 [山越 2002: 110]

(17) araata gar-aad gui-xe-de malgai-jii=**n** tar^{j}x^{j}a-da abl-aad
狐 出る-PFV.CVB 走る-FUT.PTCP-DAT 帽子-ACC=**3:POSS** 頭-DAT とる-PFV.CVB
gui-g-ee=jum=buddee. (中略) <u>malgai-jii=**n**</u> araata umd-eed=le,
走る-E-IPFV.PTCP=SFP=SFP 帽子-ACC=**3:POSS** 狐 着る-PFV.CVB=FP
（男が穴に帽子をかぶせて休んでいたところ）「狐が（穴から）走って出てきて、（彼の）帽子を頭に載せて走ったんだという。（中略）（彼の）帽子を狐がかぶってしまい、」
[山越 2002: 120]

これらの例のほとんどは、前後の文脈から「主題」と判断できる場合が多い。シネヘン・ブリヤート語はモンゴル語同様、SOV が基本語順となっているが、主題化された語が文頭（節の先頭）に移動する傾向があり、O と S の語順は比較的自由に交替する。(17) の例における下線を引いた要素は、O が S に先行して節の先頭に位置し、主題として提示されている。

[16] なお、Luvsanvandan (1966: 271) は強調のために人称所有小詞が接続しているからといって、それが主語であるとは限らない場合があり、両者を混同してはならないとも言及している。

また、(18) のように対比される要素にそれぞれ人称所有小詞を用いる例もある。

(18) xes-iiji=n xaxal-aad xɔjɔr bɔlg-ɔɔd, neg tal-iiji=**n** alxa-tee,
太鼓-ACC=3:POSS 割る-PFV.CVB 2 する-PFV.CVB 1 面-ACC=**3:POSS** 柄-PROP
nugɵɵ tal=**in** alxa-gui bɔlgɔ-hɔn=jum ge-ne.
別の 面=**3:POSS** 柄-NEG する-PFV.CVB=SFP という-PRS
「（帝釈天はシャマンの）太鼓を二つに割り、一方を柄持ちに、もう一方は柄無しにしたのだという」 [山越 2002: 126]

こうした傾向がみられることから、水野 (1991: 45) は（モンゴル語の人称所有小詞について）「旧情報のマーカー」であるとし、山越 (2006a: 292), Yamakoshi (2011) でもそれぞれ、人称所有小詞が「主題化」の機能を有すると言及している。ただし、厳密にいえばこれらの記述は正しくない。たしかに「主題」「旧情報」となる名詞句に接続している例が傾向として多くみられる。しかし、たとえば (19) (20) のように同一節中で複数の名詞句項に人称所有小詞が接続しており、名詞句項の双方ともを主題ととらえることが難しそうな例や、主題ではないと思われる名詞句に接続している例 (21) も確認される。

(19) nɔxɔi=**n** mɔrj-iiji=**n** xutel-eed,
犬=**3:POSS** 馬-ACC=**3:POSS** 引っ張る-PFV.CVB
「（彼の）犬が（その）馬を引っ張って、」 [山越 2002: 120]

(20) minii axai=**m** tarʲxʲan=**in** ix-eer ubde-zʲe bai-na.
1SG:GEN 兄=**1SG:POSS** 頭=**3:POSS** 大きい-INS 痛む-IPFV.CVB いる-PRS
「私の兄は頭がひどく痛い（よう）です」 [山越 2006a: 156]

(21) ɔdɔɔ iig-eed bii basgan-ai=**tni** altan bʲeheleg
今 こうする-PFV.CVB 1SG:NOM 娘-GEN=**2SG.HON:POSS** 金の 指輪
bidʲer-ne=bʲ.
探す-PRS=1SG
「さあそしたら私は（あなたの）娘さんの金の指輪を探しますよ」 [山越 2002: 121]

また、主題・旧情報であるからといって、常に人称所有小詞が接続するとも限らない。(22) の例では、gaxai-n tarʲxʲa「ブタの頭」がそれまでの文脈で言及されており、かつこの名詞句を含む節の先頭に位置している。しかし、人称所有小詞は接続していない。

(22) sad-tar-aa gaxai-n mʲaxa idʲ-eed=le xobsaha baha
満腹になる-LMT.CVB-REFL ブタ-GEN 肉 食べる-PFV.CVB 衣 また
umde-xe=jum=buddee. ii-g-eed **gaxai-n** **tarʲxʲa** mɔdɔn-dɔ
着る-FUT.PTCP=SFP=SFP こうする-E-PFV.CVB ブタ-**GEN** 頭 木-DAT
ii-zʲe sʲɔrl-ɔɔd, （以下略）
こうする-IPFV.CVB 串刺しにする-PFV.CVB

（占いをするためにブタの頭が必要だと裸の男がある家の者に告げたところ、その家でブタを調理し、衣が用意された）「（彼は）おなかいっぱいブタの肉を食べ、衣もまとったのだった。こうして、ブタの頭を木にこうやって串刺しにして（以下略）」
[山越 2002:121]

以上の特徴を考えると、小詞そのものが主題化の機能・旧情報のマーカーとしての機能を有しているわけではなく、主題となる host に接続する傾向があるということになろう。

3. 動詞＋人称所有小詞

動詞に接続するケースは、山越 (2002) および山越 (2006a) では全 204 例中 70 例ある（表 2 参照）。これらの例は a) 動詞の要求する項として機能する名詞節の分詞述部に接続する場合（16 例、(23)）、b) 副詞節の分詞述部[17]および副動詞述部[18]に接続する場合（50 例、(24) (25)）、c) 文末の分詞述部に接続する場合（4 例、(26)）のいずれかに分類される。

(23) xormasta teŋger^{j}-iin dɔmbɔ sɔɔ bai-x-iiji=**n** ɔl-z^{j}ɔ
帝釈天 神-GEN 壺 中に ある-FUT.PTCP-ACC=**3:POSS** 得る-IPFV.CVB
med-eed,
知る-PFV-CVB
「帝釈天の壺の中に（それ（＝魂）が）あることを知り得て、」 [山越 2002: 126]

(24) “bii jad-xa-d-aan neg xar-hoo=le=b^{j}=daa,
1SG:NOM できない-FUT.PTCP-DAT-REFL 1 見る-FUT=FP=1SG=SFP
xobsaha”, ge-xe-de=**n** baha sedx^{j}el ur ubd-eed,
衣 という-FUT.PTCP.DAT=**3:POSS** また 心 みぞおち 痛む-PFV.CVB
「『私はどうもせず、ただ見るだけです、衣を』と（彼女が）言うと、（彼は）また心を痛めて」 [山越 2002: 107]

(25) xar-haar bai-tar=**in** altan b^{j}eheleg gazar-ta
見る-SCC.PTCP いる-LMT.CVB=**3:POSS** 金の 指輪 地面-DAT
onagaa-s^{j}ix^{j}-ba ge-ne.
落とす-PFV-PST という-PRS
「（彼が）見続けていると、金の指輪を落としてしまったそうな」 [山越 2002: 121]

(26) bii ɔdɔɔ jab-xa=**mni**.
1SG:NOM いま 行く-FUT.PTCP=**1SG:POSS**

[17] 分詞は与位格語尾-da$_3$を接続することで主節動作のおこなわれた時点を、具格語尾-aar$_4$を接続することで主節動作の目的をそれぞれ示す副詞節を形成する。
[18] ちなみに、筆者のこれまでの調査ではシネヘン・ブリヤート語の副動詞として 7 種類を確認している。このうち 3 種が等位節、4 種が従属節述部となる。人称所有小詞を接続することができるのは、従属節述部として機能する 4 種（条件-bal$_3$、限界-tar$_3$、継続-haar$_4$、継起-oot$_2$）に限られる (cf. Yamakoshi 2011)。

「私はもう行きます（行かなくてはならない）」 [山越 2006a: 146]

いずれの場合にも共通しているのが、host の主語を人称所有小詞が標示するという点である。ただし、a), b) の用法は、主節主語と host の主語が異なる場合に限定される。主節主語と host の主語が同一の場合は、(27) のように host に再帰所有接尾辞 -aa$_4$ が接続するためである。

(27) uxer-ei deeguur gar-aad gui-z^{j}e jab-ahaar sumr-eed
牛-GEN 上に 出る-PFV.CVB 走る-IPFV.CVB 行く-SCC 落ちる-PFV.CVB
ona-xa-d-**aa** iim holzagar urөөhen eber-tee sar
落ちる-FUT.PTCP-DAT-**REFL** このような 気味悪い(?) 片方の ツノ-PROP 去勢牛
deer ona-s^{j}-ba.
の上に 落ちる-PFV-PST
「牛の上に出て、走っていって落っこちて、（自分が）落ちるときにはこんな気味悪い片ツノの去勢牛の上に落ちてしまった」 [山越 2002: 122-123]

ところで、2.1 で述べたとおり、ブリヤート語は隣接するモンゴル語とは異なり、主語と述語の一致がある言語である。通常、主節述語には述語人称小詞（表 5）が接続する。

	単数	複数
1 人称	=bi~=b^{j}	=bd^{j}a$_2$
2 人称	=s^{j}a$_3$~=s^{j}	=ta$_3$~=t[19]
3 人称	無標	

表 5. シネヘン・ブリヤート語の述語人称小詞

述語人称小詞は述部が名詞の場合 (28) も動詞の場合 (29) も関係なく用いられる。

(28) bii sorags^{j}a=**b^{j}**.
1SG:NOM 学生=**1SG**
「私は学生です」 [山越 2006a: 141]

(29) bii zorgaan sag-aar bod-dog=**bi**.
1SG:NOM 6 時-INS 起きる-HBT.PTCP=**1SG**
「私はいつも 6 時に起きます」 [山越 2006a: 170]

a) 名詞節述部、b) 副詞節述部においては、述語人称小詞のかわりに人称所有小詞が接続し、主語の人称を示す。それに対し、述語人称小詞は主節述部にのみ接続し、従属節には接続しない。つまり、(23)-(25) における人称所有小詞の位置にはあらわれない。しかし、ここで問題となるのが上記 c) (26) の場合である。(26) は、主節述語であるにもかかわらず、

[19] 2 人称複数述語小詞は、2 人称単数の敬称としても用いられる。

人称所有小詞が接続している。

(26) のように文末に用いられる人称所有小詞は、その用例がきわめて限定されているようである。対象としたテキスト中では、このほか (30)-(32) の例が確認された。

(30) bii zaabaha sag-t-aa xur-xe=**mni**.
1SG:NOM 必ず 時-DAT-REFL 至る-FUT.PTCP=**1SG:POSS**
「私は必ず時間までに到着しないと（到着しなくてはならない）」 [山越 2006a: 146]

(31) bii munөө jab-xa=**m**.
1SG:NOM いま 行く-FUT.PTCP=**1SG:POSS**
「私はもう行きます（行かなくてはならない）」 [山越 2006a: 170]

(32) bii onta-xa=**m**. deŋ ul^{j}ee-z^{j}e ug-ii=s^{j}.
1SG:NOM 寝る-FUT.PTCP=**1SG:POSS** 明り 消す-IPFV.CVB 与える-2.IMP=2SG
「私は寝ます。明りを消してください」 [山越 2006a: 176]

確認された例は、いずれも未来分詞に 1 人称所有小詞が接続している。これら(26) (30)-(32) の用例のほか、日常会話の観察でもこの [未来分詞+1 人称所有小詞] の形式しか確認していない。また、この構造はいずれも「当該動作をすぐにおこなう必要がある」という「義務」の意味を伴う。

(26) (30)-(32) などの文では、人称所有小詞のかわりに述語人称小詞を接続することも可能である。ただし (26) の人称所有小詞を述語人称小詞と交換した (33) では、「義務」の意味合いが消える。(30)-(32) で用いられている人称所有小詞を述語人称小詞に交換した場合も、いずれも非文とはならないが「義務」の意味合いはなくなる。

(33) bii ɔdɔɔ jab-xa=**b^{j}**.
1SG:NOM いま 行く-FUT.PTCP=**1SG:POSS**
「私はもう行きます」

このような人称所有小詞、述語人称小詞のふるまいは、シネヘン・ブリヤート語に非常に近いブリヤート語ホリ方言[20]でも同様に確認される。Skribnik (2003: 118) は、述語人称小詞は命令形を含む定動詞 (finite form) および定形述語 (finite predicates) として機能する分詞 (participle) に接続するのに対し、非定形の分詞・副動詞 (non-finitely used participial forms and converbs) の主語は人称所有小詞および再帰所有語尾によってあらわされると説明したうえで、(26) (30)-(32) のような 1 人称所有小詞が定形述語として機能する未来分詞に接続する例を特別なケース (a special case) として示し、未来分詞は述語人称小詞、人称所有小詞のどちらとも組み合わせて用いることができると指摘している。

[20] シネヘン・ブリヤート語は、ブリヤート語ホリ方言の下位方言であるアガ方言に由来する。アガ方言話者が中国領に亡命し、世代を重ねるにつれて近隣のモンゴル語・中国語等の影響を受け変化した。それによって現在のシネヘン・ブリヤート語が形成されている。両言語には音韻・形態面でいくつか相違があるが、統語においては差異はほとんどないと考えられる。

また Skribnik (2003: 118) は、この文末の人称所有小詞の用法がモーダルな意味合い（「義務」）を含むという点から、次の (34) のような人称所有小詞の用法に類似していると示唆している。(34) はブリヤート語ホリ方言の例である[21]。

(34) gansax-iiji edi-xe=b ge-zhe hana-ha=**mni**,
ただ一つのもの-ACC 食べる-FUT.PTCP=1SG という-IPFV.CVB 思う-PFV.PTCP=**1SG:POSS**
xoyor bai-na=gü.
２ ある-PRS=Q
'I intended to eat only one, but there seem to be two [here].' [Skribnik 2003: 118]

(34) では従属節の述語分詞に人称所有小詞が接続している。ただし (34) は Skribnik (2003) の解釈を見るかぎり、話し手の「意志」性はみられるが、「義務」の意味は伴っていない。

また、文末で用いられる述語人称小詞と人称所有小詞は、統語的にみると若干ふるまいが異なる。述語人称小詞は承接順序において最後尾に接続するが (35)、人称所有小詞は疑問小詞よりも host に近い位置に接続する (36)[22]。

(35) sʲii dɔrɔɔ xobsaha umd-ee=he=**g=sʲe**?
2SG:NOM すぐ 衣服 着る-IPFV.PTCP=PFV=Q=**2SG**
「あなたはすぐ服を着ましたか?」 [山越 2006a: 162]

(36) sai-g-aa oo-xa=**mnai=go**?
茶-E-REFL 飲む-FUT.PTCP=**1PL:POSS**=Q
（訪問した聞き手に対して）「（私たちは）お茶を飲みませんか?」
[日常会話からの収集／録音なし]

つまり、単に述語人称小詞と人称所有小詞が交替可能ということではなく、そもそも述語人称小詞によって完結している文と、人称所有小詞が文末に接続している文とでは構造が異なることが推測される。文末で人称所有小詞が用いられている文は、(37) にみられるような従属節が基層 (37)A にあり、その主節が何らかのかたちであらわれないもの (37)B ととらえれば、従属節+文末の疑問小詞という構造も説明できる。

(37) A. [従属節]=POSS, [主節]=Q → B. [従属節]=POSS=Q

そうだとすると、人称所有小詞が文末に用いられている文は、主節が欠落し、従属節が残された、つまり脱従属化 (insubordination) が起こったものととらえられないだろうか。

脱従属化節は、従属節で用いられる場合とは異なる機能を有することが Aikhenvald (2004)、Evans (2007) らによって指摘されている。さらに、その機能の類型化を試みた Evans (2007:

[21] Skribnik (2003) の音韻表記・訳にもとづく。形態素分析およびグロスは筆者による。
[22] ただし、人称所有小詞と述語人称小詞の両方ともが一つの host に対して同時に用いられる例は確認していない。

401) によれば、さまざまな「義務 (deontic meanings)」をあらわす脱従属節が多くの言語で用いられているという。(26) (30)-(32) の例は、従属節として用いられている (34) とは異なる機能（「義務」）を有し、その機能も脱従属節の類型にあてはまる。

また、主節の欠落によって脱従属化したととらえれば、(35) (36) にみられる述語人称小詞との構造の差異も説明可能となる。また「主節述部においては述語人称小詞が主語の人称・数を示し、主節以外では人称所有小詞が主語の人称を示す」というように両小詞の機能的差異も説明できるようになる。ただし現時点では用例がきわめて少ないことから推測の域を脱しきれていない。今後より注意深く観察・分析する必要がある。

なお、(26) (30)-(32) (36) のように文末に人称所有小詞が接続する用法は、モンゴル語にも確認される。シネヘン・ブリヤート語とは異なり、（現代の）モンゴル語では未来分詞+3人称所有小詞という組み合わせに限られるが、文末に人称所有小詞が用いられる場合 (38) がある[23]。

(38) margaaš bɔrɔɔ ɔr-ɔx=**n**=ee.
明日 雨 入る-FUT.PTCP=**3:POSS**=SFP
「明日は雨が降りそうです」 [岡田・向井 2006]

岡田・向井 (2006) によれば、これは「やや弱い証拠に基づく推定」を意味するという。つまり、証拠性 (evidentiality) にかかわる文ということになる。シネヘン・ブリヤート語の場合は 1 人称所有小詞が接続する例しかみつかっておらず、かつこちらはモーダルな意味合い（「義務」）を含む文であるのに対し、モンゴル語では 3 人称所有小詞が接続し、かつ証拠性がかかわっており、その用法・機能ともに違いがみられる。しかし、脱従属節が証拠性にかかわる表現となるケースもいくつかの言語で確認されており (cf. Aikhenvald 2004, Evans 2007)、やはり脱従属節である可能性も捨てきれない。(38) のような例も脱従属節と認められるかどうかについては別途検討する必要がある。しかし、系統的にも地理的にも非常に近い両言語で、こうした特別な構造が、それぞれ異なる機能を有しているという点は興味深い。

4. おわりに

以上、シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞のふるまいを概観してきた。その機能は次のようにまとめられる。

名詞類に接続する場合は、host の所属先もしくは host に関係する人称・数を示す。ただし、聞き手の所有物ではない・聞き手に直接関係のない host に 2 人称所有小詞を接続することで、host に対して聞き手の注意・関心を引きつける機能をになうこともある。

また、人称所有小詞は動詞に接続し、当該動作の主語の人称・数を示す機能も有する。ただし、接続する動詞は主節述語以外の動詞に限られる。文末の未来分詞に 1 人称所有小詞が接続し、「～しなければならない」といった「義務」の意味が含まれる場合があるが、これは人称所有小詞を伴った脱従属節ととらえられる可能性がある。

[23] 岡田・向井 (2006) にもとづく。ただし音韻表記・形態素分析およびグロスは筆者による。

名詞句・動詞それぞれに接続する用法をみると、基本的には「文中にあらわれる要素に関連する人称・数を標示する」ことが人称所有小詞の機能といえるだろう。ただし、名詞類に接続して所属先の人称・数を標示する場合については、人称代名詞属格によって所属先・所有者を標示する場合との機能的差異がいまだ明らかではない。また、文末の未来分詞に接続する例を脱従属節とみなせるかどうかについても、十分な分析が求められる。今後の課題としたい。

略号一覧

1,2,3: 人称、ABL: 奪格、ACC: 対格、CVB: 副動詞、DAT: 与位格、E: 挿入音、FP: 焦点小詞、FUT: 未来、GEN: 属格、HBT: 習慣、HON: 敬称、IMP: 命令、INS: 具格、IPFV: 未完了、LMT: 限界、NEG: 否定、NOM: 主格、PFV: 完了、PL: 複数、PN: 固有名詞、POSS: 所有、PROG: 進行、PROP: 所有物、PRS: 現在、PST: 過去、PTCP: 分詞、Q: 疑問、REFL: 再帰、SCC: 継続、SFP: 文末小詞、SG: 単数

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality.* Oxford: Oxford University Press.

Evans, Nicholas (2007) Insubordination and its uses. In: Irina Nikolaeva ed. *Finiteness.* Oxford: Oxford University Press. 366-431.

一ノ瀬恵 (1988) 「モンゴル語の人称代名詞と人称関係小辞について」『日本モンゴル学会紀要』19: 15-29.

Janhunen, Juha (ed.) (2003) *The Mongolic Languages.* London/New York: Routledge.

Kullmann, Rita and D. Tserenpil (1996) *Mongolian Grammar.* HongKong: Jensco.ltd.

Luvsanvandan, Shadavyn (1966) *Orchin Tsagijn Mongol Xel Züj.* [*Modern Mongolian Grammar*] Ulaanbaatar: Ulsyn Xevlelijn Xereg Erxlex Xoroo.

水野正規 (1991) 「モンゴル語の所属小辞」『日本モンゴル学会紀要』22: 42-56.

岡田和行・向井晋一 (2006) 「東外大言語モジュール：モンゴル語文法モジュール（標準コース Lesson 26, Step 1. モダリティ(6) 概言[解説]）」 http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/mn/gmod/courses/c01/lesson26/step1/explanation/082.html（2011 年 2 月 14 日最終閲覧）.

小沢重男 (1986) 『増補 モンゴル語四週間』大学書林.

Pellard, Thomas (2010) 「宮古島大神方言の副動詞と脱従属化」『日本言語学会第 140 回大会予稿集』日本言語学会. 316-321.

Poppe, Nicholas. (1960) *Buriat Grammar.* Bloomington: Indiana University Press.

Skribnik, Elena (2003) Buryat. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages.* London & NewYork: Routledge. 102-128.

Street, John C. (1963) *Khalkha Structure.* Bloomington: Indiana University Press.

梅谷博之 (2003) 「モンゴル語の二人称所属小辞」『東京大学言語学論集』22: 209-232.

山越康裕 (2002) 「シネヘン・ブリヤート語テキスト」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』8: 95-129.

――― (2004) 「モンゴル諸語の‘particle’について：シネヘン・ブリヤート語の事例から」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』11: 151-177.
――― (2006a) 「シネヘン・ブリヤート語テキスト：日常会話を題材にした基本文例集」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』13: 139-180.
――― (2006b) 「シネヘン・ブリヤート語」中山俊秀・江畑冬生編『文法を描く 1：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』271-298. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
――― (2007) 「ハムニガン・モンゴル語テキスト：日常会話を題材にした基本文例集」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』14: 119-158.
――― (2010) 「ハムニガン・エヴェンキ語とハムニガン・モンゴル語の所有構造：周辺諸言語の影響とみられる特徴について」呉人恵編『環北太平洋の言語』15: 101-116.
Yamakoshi, Yasuhiro (2011) Shinekhen Buryat. In: Yasuhiro Yamakoshi ed. *Grammatical Sketches from the Field.* Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. 137-177.

Personal Possessive Particles in Shinekhen Buryat

Yasuhiro YAMAKOSHI
(Sapporo Gakuin University)

This paper aims to describe the function of personal possessive particles in Shinekhen Buryat.

In this language, nouns and verbs take a personal possessive particle. Regarding nouns, the particle indicates the person/number of the possessor (or a related person).

In the case of verbs, participles and some converbs in the subordinate clause take the personal possessive particle that agrees with the person/number of the subject. Furthermore, future participles in the sentence final position sometimes take the first personal possessive particle. Such future participle sentences express the deontic meaning: “I must V” or “I have to V.” They are semantically different from the subordinate future participle clauses (“I intended to V, (but) ...”) and syntactically different from others that take personal predicative particles. We can consider the sentences with personal possessive particles in the final position as insubordinated clauses.

（やまこし・やすひろ　yamyas@sgu.ac.jp）